

動き出した品詞論

——18世紀後半の英国の場合——

宮 脇 正 孝*

目 次

1. はじめに
2. 動き出した品詞論
 - 2.1 Anselm Bayly (1758)
 - 2.2 Adam Smith (1761)
 - 2.3 Joseph Priestley (1762)
 - 2.4 *Encyclopaedia Britannica*, 1st edition (1771)
 - 2.5 Charles Coote (1788)
3. 総 括
 - 3.1 Bayly (1758)
 - 3.2 Smith (1761)
 - 3.3 Priestley (1762)
 - 3.4 *Encyclopaedia Britannica* (1771)
 - 3.5 Coote (1788)
4. 比較検討
 - 4.1 精神の発達と品詞発生の順序
 - 4.2 必須の品詞と必須ではない品詞
 - 4.3 最初の品詞：動詞 or 名詞
 - 4.4 総合から分析へ or 分析から総合へ
 - 4.5 ベイリーからクートまでの変遷

*専修大学商学部教授

1. はじめに

西洋の言語論においては、古代ギリシャにおけるその始まりから品詞論が一つの中心的なテーマであった。日本語で品詞と訳される元来のギリシャ語は *méros lógou* であり、「ロゴスの構成要素」という意味である。「ロゴス」は多義語であるが、この場合は「文」というほどの意味にとって差し支えない。すなわち品詞とは「文を構成する要素」ということである。

まずプラトン (Plato, 427-348 B.C.) が、文をオノマとレーマとに分けた¹⁾。一方、オノマは主語に当たるものであり、名詞的構成要素である。他方、レーマは述語に相当するものであり、動詞的構成要素である。品詞としては、ここに名詞と動詞の始まりを見ることができる。

次にアリストテレス (Aristotle, 384-322 B.C.) は、オノマとレーマに加えてシュンデスモスを認めた。これは、後に接続詞、前置詞、冠詞、代名詞として区別されることになる要素を包括したカテゴリーである。文の主的構成要素であるオノマとレーマに対して、従的構成要素をシュンデスモスとして認知したことになる。

その後ストア学派が3段階に渡って、アリストテレスから受け継いだ品詞体系の細分化を進めていった。第1段階として (c. 300 B.C.), シュンデスモスの中で、屈折変化のある要素 (後の冠詞と代名詞) が屈折変化のない要素 (後の接続詞と前置詞) から区別され、前者はアルスロンと呼ばれ、シュンデスモスという用語は後者にのみ適用されることになった。第2段階としては (3rd cent. B.C.), オノマが固有名詞と普通名詞とに区別され、オノマの呼称は前者にのみ限定され、後者はプロセーゴリアと呼ばれた。第3段階では (2nd cent. B.C.), プロセーゴリアの中から副詞が切り離され、メソテースという用語が与えられた。

次に注目すべきは、アレクサンドリア学派である。この学派の品詞分類

の決定版は、ディオニシウス・トラクスの『文法学』(Dionysius Thrax, *Téchnē grammatikḗ*, c. 100 B.C.)に見ることができる。そこではストア学派の固有名詞と普通名詞との区別は解消され、再び一つの名詞(オノマ)というカテゴリーに括られた。分詞(メトケー)が動詞(レーマ)から切り離され、独立した品詞となった。シュンデスモスは接続詞と前置詞とに分けられ、シュンデスモスは前者の呼称に限定され、後者はプロテシスと呼ばれた。アルスロンは冠詞と代名詞とに分けられ、アルスロンの用語は前者にのみ適用され、後者はアントーニミアと命名された。副詞はストア学派のメソテースの代わりに、エピレーマと呼ばれるようになった。かくして、日本語で言えば、名詞・動詞・分詞・冠詞・代名詞・前置詞・副詞・接続詞の8品詞体系が確立されたのである。

ラテン語文法にも、品詞を8つ認めるという慣行が継承された。しかしラテン語にはギリシャ語の冠詞に相当するものがないので、その代わりに間投詞(インテルイェクチオー)が独立した品詞として認められるようになった。冠詞を間投詞に置き換えた8品詞体系は、ドナートゥス(Donatus, 4th cent.)やプリスキアヌス(Priscian, c. A.D. 500)らの後期ラテン語文法家の著作の中に見ることができる。そしてこの8品詞体系が中世のラテン語文法、および近世初期の各国語の文法にも引き継がれていくことになるのである。

英語に限って見ても、最初の英文法書であるプロカー(William Bullokar, ?1531-1609)の *Pamphlet for Grammar* (1586)でも、名詞・動詞・分詞・代名詞・副詞・前置詞・接続詞・間投詞の8品詞が認められている。現代の英文法との明らかな違いは、形容詞が独立した品詞として認められていないことである。ギリシャ語およびラテン語文法では、形容詞は名詞と形態変化が似ていることから名詞と同じカテゴリーに入れられ、その下位分類として、noun substantive(実詞)と noun adjective(形容詞)とに分けられていたのである。英語では17世紀末のレイン(A. Lane, fl. 1695-

1700) の *A Key to the Art of Letters* (1700) あたりから、形容詞が独立した品詞として認められるようになっていく。また分詞を独立した品詞としては認めない体系も登場する。さらに英語に特有な冠詞を別個の品詞として認める文法書も出てくるようになる²⁾。

17世紀後半頃から、普遍文法や哲学文法が盛んに論じられるようになる。ある個別言語に特有の文法を記述するのではなく、すべての言語に共通すると思われる文法原理を探求しようとする動きである。英国ではベーコン (Francis Bacon, 1561-1626) によるこの種の言語研究の要請に応える形で起り、大陸ではフランスのポール・ロワイヤル文法 (C. Lancelot and A. Arnauld, *Grammaire générale et raisonnée*, 1660) などに触発された流れである。このような探求においてもラテン語文法の8品詞体系や、現代語流に形容詞や冠詞を独立させた8ないし9品詞体系が当然の所与として採用された。すなわち8品詞は、言語を成立させるために最初からあるものとされ、それを言語の中に見いだすのが研究者の任務とされたのであった。

18世紀中頃になると言語の起源への関心が高まってくる。興味深いことに、そこでも8ないし9品詞というカテゴリーが考察の枠組みとして採用される。しかし普遍文法論の場合とは異なり、言語起源論は8ないし9品詞を人類の言語に初期段階からすべて備わっているものとしてではなく、人類の精神の発達と並行して徐々に生み出されていったものと考えた。すなわちさまざまな品詞がどのような過程を通して、どのような順序で発生したかを問題としたのである。それまで静的であった品詞論が動き出したと言えよう。

大陸ではフランスのコンディヤックの『人間認識起源論』(Etienne Bonnot de Condillac, *Essai sur l'origine des connaissances humaines*, 1746), ルソーの『人間不平等起源論』(Jean-Jacques Rousseau, *Discourse sur l'origine de l'inégalité parmi les hommes*, 1755) および『言語起源論』(*Essai sur l'origine des langues*, 1781), またドイツのヘルダーの『言語起源論』(Johann

Gottfried Herder, *Abhandlung über den Ursprung der Sprache*, 1772) など
にこの種の考察を見ることができる。では英国の場合はどうか。このよう
な論考の流れを18世紀後半の英国に見いだし、それを年代順に概観し、そ
の言説を辿るのが本稿の目的である。

2. 動き出した品詞論

2.1 Anselm Bayly (1758)

品詞論を言語起源論的観点から捉える動き、すなわち本稿で言う「動き
出した品詞論」は、まずアンセルム・ベイリー (Anselm Bayly, 1719-94)
の *An Introduction to Languages, Literary and Philosophical* (1758) に見る
ことができる。タイトル中の “Literary and Philosophical” という文句は
ベーコンに負うものであることを、序文の中でベイリーは明確に述べてい
る (1758: A4r)。

ベーコンは *Advancement of Learning* (1605) の増補ラテン語版である
De Augmentis Scientiarum (1623) において、文法を「文学的文法」(gram-
matica literaria) と「哲学的文法」(grammatica philosophica) の2種類に
区別した。前者が単に個別言語の習得を容易ならしめることを目指すもの
であるのに対して、後者は哲学に資することを目的とするものであり、語
と物あるいは理性との関係を探求することを課題とする。語は直接に物を
表すわけではなく、理性によって捉えられた限りにおいての物、言い換える
と物の概念を表すわけであるから、力点は語と理性との関係にある。ベー
コンは「確かに語は理性の足跡であり、足跡は体について何らかのことを
教えてくれるのである」と述べている。これを広げて言えば、言語の研究
は人間の精神の働きについての理解につながるということである。ベー
コンはこの種の研究は当時十分になされていないとし、後の学者の研究課

題として提示していたのである（1879 [1623]：653-55）。ベイリーはこれを受けて、単なる「文学的文法」にとどまらず、このような「哲学的文法」をも扱う意欲を示しているのである。

本稿のテーマである品詞論について見てみよう。まずベイリーは、言語は絵画のように現実を写すものであるという前提から出発して、次のように主張する。

Language is a Kind of Painting, as it were, the Copy of universal Nature; Picture-like it supplieth the Place of Originals, and bringeth them into an ideal Existence to every Spectator: Or in short and plain Expression, Words are the Substitutes of *Things*, their *Actions* and *Relations*. (1758: 19)

言語が現実を写すと言っても、それは「イデア的な存在に変えて」とあるので、むしろ人間の精神による把握を通じてである。人間の精神は現実の様態を「もの」・「行為」・「関係」に還元して把握し、それに応じて語はこれら3つのカテゴリーのいずれかを表す。したがって、すべての語は3つの品詞に分類できることになる。ものを表す「名詞」(noun)、ものの行為あるいは状態を表す「動詞」(verb)、そしてものや行為・状態の諸関係を表す「小詞」(particle)である。中でも名詞と動詞を「主要な品詞」(principal parts of speech)としており、小詞は名詞と動詞の「従者」(attendants)としている。

ここまでは、名詞・動詞・小詞から成る3品詞論である。それぞれの品詞に下位区分はあるものの静的な大枠である。この枠組みに動的な要素が加わるのは第3部においてである。そこに収められた第1論文で、ベイリーは「言語は人間に生まれつき備わっているものなのかどうか」という言語起源にまつわる問題を取り上げ、結論として「理性と言語能力は生得的なものであるが、それらを適用し、行使するには、教育と経験と学習とが必要である」(1758: 22, 24)と述べている。つまり人間は言語を生み出

す能力は本来的に備えているけれども、言語がいきなり誕生したわけではなく、その能力を徐々に行使しつつ時間をかけて言語を作り出していったという見解である。そこで先に見た3品詞にしても、同時に発生したわけではなく、人間の能力の発揮の仕方に応じた時間的順序があることになる。

ベイリーは第2論文でこの品詞発生順序の問題を取り上げ、次の2段階に分けて論じている。

First then we will enquire what part of speech it is proper to fix upon for the Radix; and Secondly, offer some directions for tracing the Branches. (1758: 72)

すなわち第1の問題は「どの品詞が根源的なものか (=最初のものか)」であり、第2の問題は「枝分かれしたもの (=他の品詞) はどうやって辿ることができるか」である。ベイリーはまず試みに自然界の側から出発し、「自然の秩序において最初のもはものである。存在として、ものは疑う余地なく行為や関係に先行している。というのは、ものは行為や関係の言わば基底だからである」と言う。この観点からすれば、「名詞をもっとも根源的な品詞とし、他の品詞はそこから引き出されるもの」と考えたいかもしれない。が、これは人間から独立した自然界を出発点とし、言わば神の目から見た場合のことである。人間の認識能力を考慮に入れると、これとは異なる見方をしなければならない。人間はそもそもものをそれ自体として別個に認識するわけではなく、常にそれが参与する現象の中において捉えている。言い換えれば、人間はものを、それがあがる行為に参与して初めてその行為全体の中に知るのである。したがって、最初に人間が外界を捉える枠組みは、ものではなく行為である。そこからベイリーは「我々は動詞に優先権を与えないわけにはいかない。なぜなら名詞は行為に参与するものとして、動詞の中に見られるからである」とし、「一般的に言って、動詞が根源的な品詞である」と結論する (1758: 72-73)。

2.2 Adam Smith (1761)

今日『国富論』(*An Inquiry into the Nature and Causes of the Wealth of Nations*, 1776)の著者として記憶され、「経済学の父」と呼ばれるアダム・スミス(Adam Smith, 1723-90)は言語問題にも関心を持っていた。スミスは1751年にグラスゴー大学の論理学・修辞学教授(Professor of Logic and Rhetoric)に就任し、翌年に道徳哲学教授(Professor of Moral Philosophy)に移籍してからも、修辞学と文学についての講義を続けたのであった。またスミスの最初に出版された著作がサミュエル・ジョンソン(Samuel Johnson, 1709-84)の『英語辞典』(*A Dictionary of the English Language*, 1755)の書評であったことから、彼の言語問題への関心を窺い知ることができる。ここで取り上げるスミスの言語起源論“Considerations concerning the First Formation of Languages”は1761年に*The Philological Miscellany*という複数の著者による論文集に最初に発表され、彼の*The Theory of Moral Sentiments*(1759)の第3版(1767)以降、巻末に付されるようになったものである。

スミスの言語起源論はコンディヤックやルソーらのそれと同じく、「理論的あるいは推論的歴史」(theoretical or conjectural history)と呼ばれるものである³⁾。つまり実証可能な事実に基づいて経験的に言語の発達段階を記述するのではなく、もし人間が言語のない状況に置かれたとしたらいかにして言語を作り出していったと考えられるかを、現在人間性について知られている諸原理を与件として思弁的に推論するものである。スミスは名詞の起源から説き起こす。

もしここに未開人(savages)が2人いて、これまで話すことを教えられたことがなく、他の人間の社会からも隔絶したところで育ってきたとしたら、どのようにしてお互いの必要を相手に伝えるための言語を作っていくであろうか。当然ごく初期の段階に、あるもの(objects)を示すためにある音を発するようになるであろう。こうしてまず彼らにとってもっと

もなじみがあり、もっとも頻繁に言及する機会のあるものが特定の名前を振り当てられるようになるであろう。たとえば、彼らを風雨から守ってくれる特定の洞窟、彼らの飢えをしのぐ果実を与えてくれる特定の木、彼らの渇きを癒してくれる特定の泉などが、最初に「洞窟」(cave), 「木」(tree), 「泉」(fountain) などの語によって命名されるものであろう (203)⁴⁾。

後にこれら未開人たちの経験が増え、最初のものとは異なるいくつかの洞窟、木、泉を目にし、それらに言及する必要が生じるようになると、彼らは当然最初になじんでいた洞窟、木、泉を表すために用いていた名前を、これら新しいものにも与えるであろう。というのは、未開人たちは新しい洞窟、木、泉を見ると、必ずやそれらがよく似ているすでに知っている洞窟、木、泉を思い浮かべ、同時にそれらの名前も思い出すに違いないからである。すなわち未開人たちは何か新しいものについて互いに伝え合わなければならないとなると、それに類似しているすでになじみのあるものの名前を用いることになるということである。かくして「元来は個体の固有名称であった語が、それぞれ気づかないほど徐々に多数のものの一般名称になってゆくのである」。つまり最初の名詞は特定の個物を表す固有名詞 (proper name) であり、それが次第に種や類を表す普通名詞 (common name) になってゆくという見解である。そしてそこに働いているのは、ある個体と別の個体とを比較し、その間に類似性を見だし、それらを同じカテゴリーに括る人間の認知能力であると言える (204)。

こうして数多くのもが種や類に分類され、普通名詞で表されるようになると、今度はある特定のものに言及したいとき、それを同じ種や類に属する他のものから区別する必要が生じてくる。そのような場合、第1に、言及したいある特定のものの特有の「性質」によって、第2に、それが他のものと結ぶ特有の「関係」によって区別することになる。こうしてさらに2つの種類の語が生まれることになる。性質を表す語と関係を表す語である (205)。

形容詞 (noun adjective) が性質を表す語であり、その性質とはある特定のを限定していると考えられるものである。たとえば「緑の」(green) という語は、それが適用される特定のを限定していると考えられる性質を表している。したがって、この種の語は特定のを同じ普通名詞で示される他のものから区別するのに役に立つ。「緑の木」(green tree) と言え、ある特定のを枯れている木から区別することができるであろう (205)。

前置詞 (preposition) が関係を表す語であり、その関係とは相関的なものとの関連で考えられるものである。たとえば of, to, for, with, by, above, below などは、これらの前後に置かれた語によって表されるものの中に存する何らかの関係を示している。この種の語は、特定のを同じ種に属する他のものからその特有の性質だけではうまく区別できない場合にも区別するのに役立つ。たとえば「牧草地の緑の木」(the green tree of the meadow) と言え、ある特定のを、その性質によってのみならず、それが他のものに対して立つ関係によっても区別することができる (205-206)。

形容詞はその性質からして一般的・抽象的な語であり、それが等しく適用されうる複数のものから成る種概念を前提とする。たとえば「緑の」という語は、「洞窟」という語の場合のように元来ある個体の名称であったものが後にある種名称になったというものではない。「緑の」という語はもの名前ではなく、もの特定の性質を示すのであるから、最初から一般的な語であり、同じ性質を持ついかなるものにも等しく適用できるものであったに違いない。このような語の創造には、ある性質を有するものと有さないものとを比較し、区別した上で、ある性質を有するものの中からその性質自体を引き出して抽象化する高度な認知能力が必要である。したがって、形容詞が最初に作られた語であるとはとても考えられないのである (206-207)。

もし形容詞の創造にこのように大きな困難が伴っていたとしたら、前置詞のそれはさらに困難であっただろう。第1に、関係というものの自体が性質よりも形而上学的な概念である。ある性質を説明せよと言われて戸惑う人はいないが、ある関係によって理解されるものを明確に表現できる人はほとんどいないであろう。第2に、前置詞は常に相関物との関連で関係を示すわけであるが、前置詞の意味に相関物は含まれず、前置詞は関係のみを表すものである。したがって、このような語を作り出した人間は、関係だけを相関物から切り離して考えることができる相当な抽象能力を持っていなければならなかったはずである。第3に、前置詞はその性質からして一般的な語であり、作られた当初から同様のいかなる関係にも等しく適用できるものであったに違いない。このような語を創造した人間は、関係を相関物から切り離して理解するばかりでなく、ある関係を別の関係と区別して捉えることができたに違いない。つまりある一つの関係を抽象する能力に加えて、さまざまな関係を比較し、一般化する能力をも備えていたということである (209-210)。

スミスは次に動詞に話題を転じる。彼は「動詞は、必ずや、言語形成へのまさに最初の試みと同時期のものであったに違いない」と言い、動詞が最初の品詞であるという見解を示している。人が話すのは、何かがどうである、あるいはどうではないという意見を表明するためであるが、そのような陳述は動詞の助けなしにはおこなえない。言い換えると、動詞がなければそもそも人が話す目的を果たせないことになる。したがって、動詞こそが言語草創期における最初の語であるはずだということである (215)。

動詞の中でもとりわけ非人称動詞 (impersonal verb) が最初に作られた動詞であっただろう。というのは、非人称動詞はある出来事全体を1語で表現するので、出来事を主部と述部といった構成要素に分割する認知能力の働きの前提としておらず、そのような能力をまだ持たない初期の人間にも創造可能であっただろうからである。たとえばラテン語の非人称動詞

の *pluit* や *tonat* は、それぞれ 1 語で「雨が降る」(*it rains*) や「雷が鳴る」(*it thunders*) という完全な陳述を表現しており、人間の精神が自然界でそれらの出来事をひとまとまりに捉える仕方を反映している。それに対して *Alexander ambulat* や *Petrus sedet* という言い回しは、それぞれ「アレキサンダーが歩く」(*Alexander walks*) や「ピーターが座っている」(*Peter sits*) という本来ひとまとまりのものとして捉えられる出来事を、主部と述部とに分けて表現している。つまりこのような言い回しで使われる動詞は、出来事をそのような構成要素に分割するだけの知的能力を前提としているということである。したがって、このような人称動詞は先に見た非人称動詞よりも後で作られたはずである。非人称動詞こそが言語の初期段階において使われた最初の動詞であり、またおそらくは最初の語であったと思われる (215-216)。

人称動詞によって表される出来事や状態は必ずしも第 3 者についてのものでなく、話している人についてや、話しかけられている人についても陳述する必要があるであろう。初期の言語創造者たちに「話し手・聞き手」という形而上学的・抽象的な概念を表し、あらゆる人に適用しうる一般的な語をいきなり作ることができたとは考え難い。言語の初期段階にある彼らは、人称を表すのにまずは動詞の語尾を変化させる手段に訴えたであろう。このことは、たとえばラテン語で *veni, venisti, venit* と言えば、主語を明示することなくそれぞれ語尾変化によって「私は来た」(*I came*)、「あなたは来た」(*you came*)、「彼あるいはそれは来た」(*he or it came*) を表すことに見ることができる。独立した語としての人称代名詞が作られるのは、後になってからだと考えられる (218-219)。

2.3 Joseph Priestley (1762)

神学、教育論、歴史、政治学、哲学、自然科学などの多岐にわたる分野で多くの著作を残し、とりわけ「酸素の発見者」として記憶されているジ

ヨゼフ・プリーストリー (Joseph Priestley, 1733-1804) には、言語に関する著作もある。それは彼がウォリントン学院 (Warrington Academy) の言語・文学教師時代に出した初歩的な英文法書 *The Rudiments of English Grammar* (1761) と、言語の根本原理を論じた講義集 *A Course of Lectures on the Theory of Language and Universal Grammar* (1762) である。彼の品詞発生論は後者の著作の中に見られる。

プリーストリーは名詞から話を始める。世界のもっとも初期の時代にある人類が最初に発明し、用いたであろう語は、知覚できるものの名前であっただろう。動物、野菜、人間の体の部分、太陽、月といったものの名前である。これらのものは初期の人々の目に最初についたであろうものであり、その必要性のゆえに彼らがもっとも頻繁に言及しなければならなかったものであろう。これらの名前が最初の、そしてもっとも重要な語類を成しており、文法で名詞 (noun substantive) と呼ばれるものである。これらは「アダム」(Adam), 「イヴ」(Eve), 「エデンの園」(Paradise) といった個々のもの (individuals) の名前を表す固有名詞と、類推によって同じ種 (species) のすべてのものに適用される「人」(men), 「木」(tree), 「川」(river), 「庭」(garden) のような普通名詞とに分けられる。このようにプリーストリーは最初の品詞を名詞とした上で、いきなりそれが固有名詞と普通名詞に二分できると言っており、前者が後者に先行するというような発生の順序には触れていない (50)。

ものを全体として観察する段階の次に、人間はものの部分や特性に着目するようになったであろう。そして多くのものの中にそれらが共有する特性を見いだして、それに名前を付けたであろう。まずは「固さ」(hardness), 「柔らかさ」(softness), 「長さ」(length), 「広さ」(breadth), 「白さ」(whiteness), 「赤さ」(redness) など、知覚できる性質に対する名前である。これらの名前は特定の個体ではなく、さまざまなものを想起させるものである。ここに抽象名詞の誕生を見ることになる。このように特性や性質それ

自体をそれが属するものから切り離して考えると、それを表す語は名詞になる。しかし特性や性質がそれが属するものの中に存し、そこから切り離せないものとして考えると、言語にさらに洗練を加え、それを表す語には別の形を与えることになる。たとえばライオンのことを「強さの獣」(beast of strength) と言う代わりに、「強い」(strong) と呼ぶのに必要となる語形である。この形態での性質の名称が、形容詞と呼ばれるものである。このようにプリーストリーは抽象名詞が先行し、その派生形として形容詞が生まれたと考えている (51-52)。

ある種 (species) 全体に共通の名前、すなわち普通名詞を用いるとき、その種に属するもの一般について語りたい場合もあれば、ある特定のものについて語りたい場合もある。この違いを示すために、いくつかの言語では冠詞 (article) と呼ばれる語を普通名詞の前に付けて使うようになった。前者の場合には不定冠詞 (indefinite article) が、そして後者の場合には定冠詞 (definite article) が使われる。英語を例にすると、不定冠詞を付けた a man はある男を漠然と表し、定冠詞を付けた the man はすでに言及した特定の男であるとか、状況から他と間違いようのない特定の男のことを示す。しかしラテン語のように冠詞のない言語も存在するし、ギリシヤ語などは定冠詞はあるが不定冠詞はない。このような特殊性を考えると、ここにプリーストリーが冠詞の誕生を持ち出して来ることはやや奇異な感じがする。が、彼は冠詞というものは必然的に形容詞的性質のものであると続けている。そこから考えると、冠詞の誕生を形容詞のその延長線上で扱っていると見ることができる (53-55)。

話し言葉の唯一の用途は人がお互いに情報を交換することであるので、何かものの名前を挙げると、必ずそれについて何かを確言する (affirm) ことになる。したがって、話し言葉における人間の最初の努力は、陳述 (proposition) を形成することだったであろう。陳述とは2つの観念の一致を表明する文のことである。この一致を表明するために、人は初めのう

ちはおそらく2つの観念の名称(名詞)を単に前後に並べていただけであろう。たとえば、今も話し始めた子供が a lion is strong (ライオンは強い) と言う代わりに、a lion strong (ライオン強い) と言うように。しかしやがて人は確言 (affirmation) を示すための語を導入することが便利であると気づくようになったであろう。この確言のみを表す語、すなわち2つの観念の間の一致のみを意味する語は存在動詞 (verb substantive) と呼ばれ、すべての動詞に含まれているものである。ここにプリーストリーは動詞の誕生を述べているわけであるが、その最初のもは A is B という形式で表せる陳述に必要な存在動詞⁵⁾であったとしている。そしてその後でできたすべての動詞は、概念的にこの存在動詞を含むと言うのである。

分析すると確言の観念を含むことが明らかになる語は、すべて動詞と呼ばれる。したがって、厳密かつ包括的な定義をすれば、動詞とは単に確言のみを示す語(存在動詞)か、あるいは単なる確言に加えてそれについて確言がなされるものの状態をも表す語(一般動詞)である。さらにラテン語のようないくつかの言語では、それについて確言がなされるもの(つまり主語)まで動詞で表現されることがある。ここに述べられていることを発生論的に解釈すると、プリーストリーは最初の動詞は確言のみを示す存在動詞であり、その後確言の観念に加えて属性の観念をも表す一般動詞が作られるようになったということである(58)。

ものを考え話すことの目的は、観念と観念との一致を示すことの他に、観念と観念との間のさまざまな関係表現することでもある。このような関係は、言語によって異なった仕方で表される。たとえば原因と結果の関係を考えてみよう。創造主なる神と世界とについて語り、前者が後者の原因であると言いたい場合、英語では of という語を間に置いて the creator of the world と言うであろう。ところがラテン語では後者の語の末尾を変化させて creator mundi と言う。英語の of のように、もっぱら名詞と文の一部あるいは全体との関係を示すために使われる語は前置詞 (preposition)

と呼ばれる。前置詞はすべての言語に数多く見られる。というのは、ありとあらゆる関係を示すのにそれぞれ異なる名詞の語尾変化をもってするのは無限の混乱を招くからである。ギリシャ語やラテン語でも、名詞の語尾変化（格変化）によって示される関係はよく使われるものに限られている。ここで述べられていることを発生論的に解釈すると、観念と観念との諸関係を表現するために前置詞が必要となり、作られるようになったということである（59-60）。

これ以降ブリーストリーは、他の語の代用（substitutes for other words）であるような品詞を挙げてゆく。まず接続詞（conjunction）である。接続詞は文と文とを繋ぐ語であるが、話すために絶対に必要だというものではない。なぜならば接続詞が繋ぐ複数の文は、すべての場合一つにまとめることができるからである。接続詞を使うことに利点があるとすれば、それは一つの文で言うときと込み入ってぎこちないものになってしまう表現により緩やかな言い回しを与えることである。たとえば「私が書いたのは、彼に命じられたからだ」ということを、一つの堅い文で His command was the reason of my writing と言うこともできるし、接続詞を使ってもっと優美に I wrote because he ordered me と言うこともできる。後者では接続詞 because が I wrote と he ordered me という2つの文を繋ぎ、その相互関係をはっきりと示している。接続詞は言語にとって欠かせないもの（necessaries of a language）というよりは、むしろ優美さを与えるもの（elegancies）の中に数えられるべきものである。しかし相当に必要なものではあるので、欠くべからざるというわけではないものの中では一等の位置を占めている（60-63）。

他の語の代用と言える語として次に挙げられるのは、代名詞（pronoun）である。代名詞は、発話に頻繁に登場する名詞を繰り返すのを避けるという便利さのために作り出された短い語である。たとえば話者は自分が何かしたことを言うたびに自分の名前を繰り返す代わりに、英語では I という

語を使うことができる。また誰かに話しかけるたびに相手の名前を繰り返す代わりに、*thou* という語を使うことができる。I は話す人なら誰にでも、*thou* は話しかけられる人なら誰にでも同様に適用できる普遍的な語として作られている。さらにまた、ある人やものの固有名を一度言った後ではその名前を繰り返す代わりに、*he, she, it* などの語を使うことができる。これらが代名詞であり、名詞の代わりに用いられるものである (63-64)。

次に挙げられるのは副詞 (adverb) である。副詞は他の語の代用というよりも、複数の語のまとまりを短縮したもの (contraction) と言える。たとえば *here* は *in this place* を、*there* は *in that place* を、*wisely* は *in a wise manner* を、*daily* は *every day* を短縮したものと見なすことができる (64)。

最後に言及されるのは間投詞 (interjection) である。間投詞は特定の限定された観念の表象というよりも、むしろ喜び・悲しみ・怒り・驚きといった激しい感情を表す音節の区切りがはっきりしない (inarticulate) 表現であると言える。したがって、人間の言語に固有の語というよりも、動物の分節化されない声に近いものである。この記述からすれば、プリーストリーは間投詞は人間が作り出したものとは考えていないことになる。通例品詞を列挙する場合に間投詞も含まれるので、ここに一応挙げておいたということであろう (65)。

2.4 *Encyclopaedia Britannica*, 1st edition (1771)

本来静的な品詞論に発生順という動的要素が加わることを示す興味深い事例を、今に続く権威ある百科事典である *Encyclopaedia Britannica* の初版 (1771) における「文法」(Grammar) という項目に見ることができる。

この項目は論文と言ってもよい長さであるが、執筆者の記載はない。しかし事典全体に対する文献目録が第1巻の冒頭に付いており、その中にジェイムズ・ハリス (James Harris, 1709-80) の *Hermes* (1751) が挙げられている。そして事典中の「文法」の内容を検討してみると、その本体部

分はほとんどハリスの *Hermes* の品詞論の要約と言えるものであることがわかる。ここで一つ異なるのは、一方、ハリスの品詞論は最初からすべての品詞が存在するものとしてそれぞれの品詞の意味論的存在理由を人間の精神の現実把握の仕方にさかのぼって説明しているのに対して、他方、ブリタニカの文法論はそれに加えて品詞の発生順という言語起源論的観点を取り入れていることである。つまりブリタニカの文法論は明らかにハリスの品詞論を下敷きにしており、事典項目であればその忠実な要約で済ませてもよかつたであろうところを、あえてそこに発生論的観点を加味しているのである。ハリスの *Hermes* の出版から20年が経過したブリタニカ初版の時点では、品詞を論じるに当たってどうしても発生論という動的な要素を加えなくなつたということであり、このことは20年の時間の経過の中で言語起源論に対する関心が言語を論じる者たちの間に次第に高まっていったことを示唆するものであると言える。ブリタニカの品詞論を辿ってみよう。

人間が語によって表現するのは精神に生じるさまざまな観念であるのだから、語を分けるべき種類（すなわち品詞）を確立する前に、まず観念そのものがいかにして喚起されるのかを検討しておく必要がある。このために、理性を備えた存在（すなわち人間）があらゆる先入主を一切持たずにこの地上に置かれたものと仮定してみよう。その人間の注意は、まず最初に自分の周りに目にするさまざまなものに向けられるであろう。そして当然彼はそれらのものを一つ一つ区別し、それぞれに名前を与え、その名前によってそれらのもの自体がその場になくとも、それらのものの観念が思い起こされるようにするであろう。こうすることが語の一つの豊かな源であり、あらゆる言語に共通するに違いない一つの自然な語類を形成することになる。すなわち名詞（nouns）の名で呼ばれる品詞である。そしてこれらの名詞は、存在するさまざまなものの名称であるので実詞（substantives）と呼ばれることもある。かくしてブリタニカの文法論は名詞を

最初に作られた品詞としている（728）。

同様に早い時期に、名詞で表されるものの一つ一つにはある性質（qualities）や属性（attributes）が備わっていることに気づかれるであろう。そしてそれらの性質や属性を表現するために、別の語類が必要となるであろう。たとえば「重い」（weighty）は物質の性質であり、「考える」（think）は人間の属性である。それゆえにすべての言語において、存在するそれぞれのもののさまざまな性質や属性を表すための語が作られてきたのである。これらの語はすべて属性詞（attributives）という総称的品詞名のもとに包括してもよい。ここでブリタニカの文法論が述べているのは形容詞と動詞の出現の契機である。形容詞と動詞とは、共にものの性質あるいは属性を表すという役割を果たすので包括して一つの品詞（属性詞）として扱ってよいであろうと言うのである。この扱いはハリスの *Hermes* のそれとまったく同じであるが、その誕生の契機を発生論的に述べた点が新要素である（728）。

以上の2つの語類、すなわち名詞と属性詞とは存在するすべてのものを包含することができる。というのは、存在するものは何であれ、必然的にもものものの属性のいずれかであるからだ。したがって、名詞と属性詞とは「それ自身で意味を成す語」（words significant of themselves）というさらに上位の一つのカテゴリーに括することもできる（728）。

名詞と属性詞とが言語の基盤を成すものであるとしても、人間が持つ多種多様な観念のすべてを表現するにはこれらの語だけでは不足であり、これらを繋ぐ他の語が必要となる。それはあたかも石材が建物の基盤であるにしても、それらを繋ぎとめるセメントがなければ建造物が成り立たないのと同様である。これら繋ぐための語はそれ自身で意味を持つものではなく、名詞や属性詞と結びつくことで意味を得る。したがって、これらは一括して「それ自身では意味をなさない語」（words not of themselves significant）という一つのカテゴリーにまとめることができる。が、意味を得る

仕方からこれを二分して、他の語を限定することにより意味を得る限定詞 (definitives) と他の語を繋ぐことにより意味を得る連結詞 (connectives) との2つの品詞を認めることができる。このようにブリタニカの文法論は、発生順としては、まずそれ自身で意味を成す主要語として名詞と属性詞とが作られ、その後これらと結合することによって意味を成す語として限定詞と連結詞とが作られたとしている。限定詞と連結詞についてさらに見る前に、代名詞について述べられる (728-729)。

すべての会話は個人と個人の間で行われるわけであるが、お互い同士の名前を知らない場合には、どうやって相手に話しかけ、自分に言及することができるであろうか。また自分たち以外のもので、その名前を知らないものを話題にする必要も出てくるだろう。言語発達の最初の時期には、おそらく相手や自分やそれ以外のものを指さすことでこの用を果たしていたであろう。しかしこれはきわめて不便で不完全な手段であったので、この用をなすための特定の語類を作り出すことが必要となった。かくして話し手、話しかける相手、およびそれ以外のすべてを指し示すことのできる語が作られたのである。これらは常に名詞の代わりをするものなので、代名詞 (pronouns) と呼ばれる。このように、ブリタニカの文法論は、代名詞は名詞の代わりをする品詞の必要から誕生したとしている。そこで、一方、名詞を第一種の実詞 (substantives of the first order)、他方、代名詞を第二種の実詞 (substantives of the second order) と呼んでいる。これらの名称もハリスの *Hermes* に倣ったものである (731)。

次に限定詞の誕生について見てみよう。人間の知識はいくら豊富なものであっても、せいぜい限られたものである。人間は存在するほとんどすべてのものに名前を与えてきたけれども、それらの名前のすべてを覚えることは誰にとっても不可能である。したがって、すべての名前を覚えることができなことから生じうる困難を取り除くための工夫を、言語においてしなければならなかった。ものはその下に個体や個々の事例をメンバーと

して含む一般的な部類に分類され、それら一般的部類に名称が与えられている。たとえば「動物」(animal)、「建物」(edifice)、「運動」(motion)などの普通名詞と呼ばれるものである。我々がその名称を知らない個体や個々の事例に出くわした場合にも、それらをそれが属するそれぞれの一般的部類に帰することによってある程度自分の意図する観念を伝達することができる。しかし我々が伝達したい観念は特定の個体や個々の事例についてのものであり、ゆえに同じ一般的部類に属する他のものから区別されなければならないので、一般的部類の名称(普通名詞)をそのような個体や個々の事例に限定するための語類が必要となった。この必要を契機として限定詞(definitives)という品詞が作り出されることになったのである。限定詞の中心的なものは冠詞(articles)である。英語で言えばa(n), theであり、これらの語の助けにより、a dogと言えはある一匹の犬を、またthe dogと言えは特定の一匹の犬を、「犬」という一般的部類に属する他のすべての犬から区別して話題にすることができる(740-741)。

連結詞は、文を繋ぐ接続詞(conjunctions)と語を繋ぐ前置詞(prepositions)とに二分される。ブリタニカの文法論は、接続詞については何ら発生論的説明を加えていない。前置詞の誕生については、次のように述べている。まず自然界において、他のものの助けなくお互いに結合できるものがある。たとえば量(quantities)や性質(qualities)は、それが属するもの(substances)と自然に結合できる。したがって、自然界の有り方を映す文法構造においてもa fierce lion(獍猛なライオン)やa vast mountain(巨大な山)という言い方が可能である。行為とその行為者についても同様で、Alexander conquers(アレキサンダーは征服する)という言い方ではAlexanderとconquersとを他の語を介することなく結びつけることができる。またそこに行為の受動者を結びつけることも可能で、Alexander conquers Darius(アレキサンダーはダリウスを征服する)と言うこともできる。ところがものはそれぞれに別の場所を占めて互いに独立して存在

しているのです、自然界では容易に結合しない。よってその状態を映す文法においても、名詞はお互いにそのままでは結びつかない。たとえば *The sun warms the earth*（太陽は地面を暖める）であれば、行為者を表す *the sun* と行為を表す *warms* と受動者を表す *the earth* とは、何の助けもなくお互いに結びつくことができる。しかしさらに *beams*（光）という名詞を使って「光で」という意味を表そうとすると、このままでは先の文に結びつけることができない。ここに前置詞誕生の契機がある。すなわち、このような場合にさらに名詞を文に結びつける役割を果たす語として前置詞が作り出されたのである。この例で言えば、*with* を使って *The sun warms the earth with its beams*（太陽はその光で地面を暖める）と言うようにである。（744-745）。

2.5 Charles Coote (1788)

歴史家・伝記作家として『英国史』（1791-98）や『ジュリアス・シーザー一伝』（1796）などの著作があるチャールズ・クート（Charles Coote, 1761-1835）が最初に世に問うたのは、*Elements of the Grammar of the English Language*（1788）であった。これは若年者向けの学習英文法書であるが、ジェイムズ・ハリスやジョン・ホーン・トゥック（John Horne Tooke, 1736-1812）などの哲学的言語論の影響も見られ、とりわけ序論として「普遍文法論」（“An Introduction, tending to illustrate the fundamental Principles of Universal Grammar”）が付されている点が注目される。ここに品詞を最初から所与のものとして扱うのではなく、順を追って発生していったものであるという見解が見られるからである。

まず序文の中でクートは、語は元来我々の思考の伝達のために作られたものであり、語が明確であればあるほどこの伝達という目的によりよく貢献するものであるとしている。これはすなわち、語は人間の思考を表現するものだということである。そしてジョン・ロック（John Locke, 1632-

1704) を引き合いに出して思考と語との関係の不可分なることを指摘し、文法の原理、とりわけ普遍文法の原理を知ることは、人間の精神の理解に資するものであると述べている。ところがクートに言わせれば、この方面の研究に当代十分な注意が向けられていない。それゆえに、自らの英文法書に普遍文法論を序論として付したというのである (Preface, i-vii)。

この序論においてクートは、人間はその本性からして社会的存在であることから話を始める。人間は本来社会を作るように定められており、互いに意思を伝達し合うことができなければ不幸な存在である。そしてこの意思の伝達を果たすために最適な手段が言語なのである。言語の構成要素は語であり、これを扱うのが文法である。したがって、普遍文法とはすべての言語に共通する語の種類、すなわち品詞を論じることになる (1-3)。

品詞は本質的な (essential) ものと偶有的な (accidental) ものに分けることができる。一方、本質的な品詞とは、それがなければそもそも言語が存立できないほどに意思の伝達に欠くことのできないものである。他方、偶有的な品詞とは、表現の明快さには資するけれども、言語の存立に絶対に必要であるというほどには言語の本質と融合していないものである。前者には名詞と動詞があり、後者にはその他すべての品詞が含まれることになる (5-6)。

最初期に形成された言語においては、しばらくの間は名詞と動詞のみが使われていたことであろう。名詞と動詞とはそれら自身の中に言語の本質を含み、他の語の助けなしに完全な肯定文を作ることができるからである。たとえば現代英語で言えば、Man dies, Time passes, Fire burns といった具合にである (6-7)。

これら2つの本質的な品詞のうちでは、ほぼ確実に名詞の方が先に作られたものであろう。身の回りのさまざまなものに名前を与えることの有益さはあまりに明白であり、最初に言語を作った人々がそれに気づかなかったとは考えられないからである。かくして名詞が生じ、最初は自然界に存

在するものに対する名称だったであろうが、後には人間の想像力の中に存在するものをも表示するようになってゆくのである（7）。

名詞が作り出されてからは、次にそれらによって表される人やものについて何かを確言する語のことを考えるようになるのは自然なことである。したがって、おそらく我々が今動詞（verb）と呼ぶものの導入が名詞の創造のすぐ後に続いたであろう。この品詞は文の構築に欠くことのできない重要性を持つがゆえに、まさに verb（語源的に「言葉、語」の意味）と呼ばれるのである。動詞は確言するにも語を連結するにも必要な媒介なので、これなしには文が成り立たないものである（9）。

以上が本質的な品詞とされる名詞と動詞についてである。次にクートが偶有的な品詞と呼ぶものの発生について見てみよう。名詞と動詞だけを使うことから生じるぎこちなさや不便さは、初期の人類にも当然感じられるようになったであろう。かくして彼らは新しい種類の語を作り出したり、すでにある名詞や動詞を短縮して文構造の中で主要な語が互いに結び合う諸関係を表すような語を作ったりしたのである（12）。

まず名詞と動詞の確立にすぐに続いたと考えられるのは、形容詞と代名詞の使用である。性質を示す語は、すぐにももの名前の付加物として有益になりそうだと思われたことであろう。かくして形容詞が使われるようになり、これによって人やものの属性や性質や習慣などが、それらの属する人やものと直に並べて表示されるようになったのである（12）。

また同じ名詞が継続して繰り返されるのはとても耳障りなので、名詞の短い代用物を使うことがやがてその不便さに対する適切な対処法と考えられるようになったであろう。こうして代名詞が作り出されたのである。代名詞はわずか3つの人称の変化によって、その間で会話がおこなわれている人々における状況のあらゆる変化に対応することができる。すなわち話し手の名前の代わりに、聞き手の名前の代わりに、また会話の話題になっている第三者（人ばかりでなくものも含めて）の名前の代わりにもな

り得るのである (13)。

世の中に存在するさまざまなものは、それぞれを特定の名前で区別するにはあまりにも数が多すぎる。そこでこの欠点を補うための手段がやがて求められたであろう。かくして一般的名称 (general terms) が個物を表すことを可能にする決定詞の使用が、賢明なる探求者に思いつかれたに違いない。これが今日我々が冠詞 (articles) と呼ぶものの誕生であり、冠詞を類や種を表す名詞に付加することによって個別の人やものを特定の表現することができるのである (14)。

最後にクートは、副詞・接続詞・前置詞・間投詞をまとめて一つのパラグラフで簡単に扱っている。これらの品詞の使用は言語の構造を改良したり、言語の豊かさを増進したりすることを目指した人々に当然思いつかれたことであろう。副詞 (adverb) は人が動詞の様態や動詞に属する付加的な状況を容易に表現できるようにと導入されたものである。接続詞 (conjunction) は主として文と文とを結合させるために使用されるようになったものである。前置詞は同じ文の中である語を別の語と繋ぐために使用されるようになったものである。間投詞 (interjection) はある突然の情熱や感情の表現に過ぎないものである (14-15)。

3. 総括

本稿で言う「動き出した品詞論」について、18世紀後半の英国における言説を辿ってきた。各著作ごとにまとめてみよう。

3.1 Bayly (1758)

ベイリーは最初の品詞は動詞であり、名詞はそこから引き出されたものと考えている。たとえばラテン語の名詞 *erro* (放浪者) は、動詞 *errare* (放

浪する)の1人称単数現在時制形の *erro* から来るものであるとしている。小詞については詳しく述べていないけれども、当然の含意として小詞が表す関係もやはりものが参与する行為の中か、あるいはもの同士の有り方の中に見いだされることになる。したがって、小詞は動詞と名詞ができた後にそれらから引き出されることになる。

かくしてベイリーが考える品詞発生順は「動詞 → 名詞 → 小詞」とまとめることができる。そしてこの発生順は人間の認識能力の行使の仕方と並行しているという見解である。

3.2 Smith (1761)

スミスは最初の品詞は動詞だと考えている。このことは彼がジョージ・ベアド (George Baird) に宛てた1763年2月7日付けの手紙の中で、「動詞が私の理解では最初の品詞 (the original parts of speech) であり、そもそも1つの出来事全体を1語で表すために作られたものです」(Bryce's introduction to Smith 1983 [1761]: 24) と明言していることから裏付けられる。しかも最初の動詞は1語で出来事全体を表す非人称動詞であったとする。後に人間の認知能力の発達と共に出来事とその構成要素に分解されるようになると、出来事の主体は名詞によって表されるようになり、動詞は出来事の属性だけを表す人称動詞になっていった。さらに後に動詞の語尾変化から人称代名詞が独立した。

一方、名詞は元来固有名詞であった。それが後に人間の知的能力の発達と共に普通名詞になっていった。さらに普通名詞で表される複数のものの中から特定のを区別するために、性質を表す形容詞と関係を表す前置詞が作り出された。作るのに必要な認知能力の程度から考えて、形容詞の方が前置詞よりも先に誕生したと思われる。

これらの品詞の発生順を動詞系と名詞系とに分けて図式的に示すと、以下のようになる。

動詞系：非人称動詞 → 人称動詞 → 人称代名詞

名詞系：固有名詞 → 普通名詞 → 形容詞 → 前置詞

いずれの品詞の発生も、比較・一般化・抽象化といった人間の知的能力の発達を前提とし、それと並行するものとして特徴付けられている。

3.3 Priestley (1762)

プリーストリーは最初の品詞は名詞であったとしている。初期の人間にとって知覚しやすく、頻繁に言及する必要のあったものの名前である。固有名詞と普通名詞の発生順序には触れていないが、抽象名詞は人間がものの部分や特性に着目できる発達段階に到達してから後で作られたとしている。

次に作られたのは形容詞であるとする。抽象名詞で表されるような性質が、それが属するものの中に存し、そこから不可分ものとして捉えられ、さらに言語的に表現されたものが形容詞ということになる。したがって、プリーストリーは抽象名詞が先行し、形容詞はそこから派生したものと考えている。

次に作られたのは冠詞であるとする。これは普通名詞を用いつつ、ある特定のものについて語るという必要を満たすために生み出されたものと特徴付けられている。プリーストリーは冠詞は形容詞的性質のものであるとしており、形容詞の誕生の延長線上で扱っている。

次に作られたのは存在動詞である。これはA is Bという形式で表せるような2つの観念の一致を表す陳述を可能ならしめる要素であり、人間が互いに情報交換をするために要請されたものである。その後この存在動詞に、それについて確言がなされる属性の観念が加えられて一般動詞が作られたとする。

次に作られたのは前置詞である。これは観念と観念との間のさまざまな

関係を表現する必要を満たすために作り出された要素である。

以上が言語にとって必要欠くべからざる品詞である。これ以下はなくてはならないものではなく、他の語の代用と言える品詞である。まず接続詞が文と文とを繋ぐ要素として表現に優美さを与えるために作られた。次に代名詞が発話に頻繁に登場する名詞を繰り返すのを避けるという便利さのために作り出された。さらに副詞が他の複数の語のまとまりを短縮して表現するものとして生み出されたとする。

以上は次のように図式的に表すことができる。

《言語にとって不可欠の品詞》

名詞系：固有名詞・普通名詞 → 抽象名詞 → 形容詞 → 冠詞

動詞系：存在動詞 → 一般動詞

前置詞

《他の語の代用である品詞》

接続詞

代名詞

副詞

ブリーストリーは品詞論の冒頭で「語の発達を、最初の粗野な状態から最終的な洗練に至るまでの全経路を通じて辿る」と述べているので、彼もまたそれぞれの品詞の発生が人間の知的能力の発達と並行して段階的に進行していったものと考えていると言える。

3.4 *Encyclopaedia Britannica* (1771)

ブリタニカの文法論は最初の品詞はものを表す名詞であるとしている。そしてその代わりに役割を果たすものとして代名詞が作られた。また名詞で表されるものの属性あるいは性質を表す品詞として動詞と形容詞が作り出された。さらに一般的部類を表す普通名詞を限定して個体や個々の事例

を表すために限定詞が作られた。また名詞と名詞を結びつけるために前置詞が作られた。以上の品詞のうち、名詞・形容詞・動詞はそれ自身で意味を成す語とされ、限定詞と前置詞は他の語と結びつくことによって意味を成す語とされている。図式化してみよう。

《それ自身で意味を成す語》

実詞系：名詞 → 代名詞

属性詞系：動詞・形容詞

《他の語と結びつくことによって意味を成す語》

限定詞（冠詞）

前置詞

ブリタニカの文法論の大枠はハリスの *Hermes* における品詞論の要約と言えるものであり、発生論的観点はそこに上から被せられたような要素である。したがって、取り上げているすべての品詞についてその起源を論じているわけではない。

3.5 Coote (1788)

クートは品詞を本質的なものと偶有的なものに二分して、前者の中に名詞と動詞を、後者の中にその他の品詞を含めている。発生順について言えば、当然本質的な品詞から作られたということになる。しかも名詞が先で、動詞が次であるとしている。偶有的な品詞の中では、形容詞と代名詞がまず作られ、次に冠詞が作られたとしている。その他の副詞・接続詞・前置詞・間投詞についてはまとめて扱われており、これらの発生順は明らかにされていないが、いずれも冠詞の後であるという含みであろう。図式化してみよう。

《本質的な品詞》

名詞 → 動詞

《偶有的な品詞》

形容詞・代名詞 → 冠詞 → 副詞・接続詞・前置詞・間投詞

クートの品詞発生論は学習英文法書への序論として付された普遍文法論の中に収められているものであり、以上のように短く要約できる程度のものである。

4. 比較検討

以上まとめた各著作の言説を比較検討し、共通項と相違点の中で特徴的なものを抜き出してみよう。

4.1 精神の発達と品詞発生の順序

いずれの著作にも見られるのは、それぞれの品詞は人類の精神の発達と並行して徐々に作り出されていったという視点である。言い換えると、それぞれの品詞の誕生にはそれを可能にする認知能力の発達が前提とされているということである。各著作により品詞の発生順序についての見解は異なるが、いずれも初期の人類に想定される知的能力の発達段階で創造可能であったと考えられる品詞を最初のものとし、その後の精神の漸進的な発達に応じてそれ以外の品詞が作られていったとしている点では共通である。

4.2 必須の品詞と必須ではない品詞

スミスを除くいずれの著作にも、言語にとって必須の品詞と必ずしも必須ではない品詞との二分が見られる。ベイリーは名詞と動詞を主要な品詞

とし、小詞をそれらの従者としている。プリーストリーは名詞・動詞・前置詞を言語にとって不可欠の品詞とし、接続詞・代名詞・副詞を他の語の代用である品詞としている。ブリタニカの文法論は名詞・代名詞・動詞・形容詞をそれ自身で意味を成す語とし、限定詞（冠詞）と前置詞を他の語と結びつくことによって意味を成す語としている。クートは名詞と動詞を本質的な品詞とし、形容詞・代名詞・冠詞・副詞・接続詞・前置詞・間投詞を偶有的な品詞としている。

このように品詞を大きく二分することは文法史的に見ると、12世紀前半頃に始まると思われる *categoremata* と *syncategoremata* の区別にさかのぼる慣行である⁶⁾。この本来静的な区別が、動的な品詞発生論にも継承されているさまをここに見ることができる。

4.3 最初の品詞：動詞 or 名詞

各著作によって推論する品詞発生順序は異なるけれども、最初の品詞を動詞か名詞のいずれかにしている点では共通である。一方、ベイリーとスミスは動詞を最初の品詞とし、他方、プリーストリー、ブリタニカの文法論、クートは名詞を最初の品詞としている。それぞれの根拠についてはすでに見たとおりである。

4.4 総合から分析へ or 分析から総合へ

言語のタイポロジーを論じる際に、「総合的言語」(synthetic language)であるか「分析的言語」(analytic language)であるかが問題とされることがある。たとえば、屈折変化の多い古典ギリシャ語やラテン語などは総合的言語であり、屈折変化に乏しく助動詞や前置詞を多用する現代英語などは分析的言語であると特徴付けられる。

初期の言語が総合的であったか分析的であったかという視点が、スミスとプリーストリーとに対照的に見られる。一方、スミスは最初の言語は総

合的であったとし、未開人たちは今は形容詞で表されるようなさまざまな性質をも名詞の語尾変化によって示していたであろうとする。また動詞も最初は非人称動詞であり、今なら独立した主語で示すような観念をも1語に含むものであったろうとする。他方、ブリストリーは初期の言語は分析的であったとし、性質を表す語にしても、性質自体をそれが属するものから切り離して捉えた抽象名詞が、性質をそれが属するものとの結合において意味を成すことを暗黙の前提とする形容詞に先行すると考える。また最初の動詞は確言のみを分析的に示す存在動詞であり、後にさまざまな行為内容の観念が統合されて一般動詞が誕生していったとする。

4.5 ベイリーからクートまでの変遷

本稿で取り上げた Bayly (1758) から Coote (1788) までに経過した時間がちょうど30年であること自体に意味はないが、それだけの期間には「動き出した品詞論」の変遷を見て取ることもできる。

Bayly (1758) は、ベーコンの刺激を受けて普遍文法における品詞論にかなり素朴な形で発生順という動的な要素を付け加えたものであり、この種の論考の嚆矢と言ってよい。Smith (1761) と Priestley (1762) とは、品詞発生論の本格的な著作として2大巨頭を成すものである。*Encyclopaedia Britannica* (1771) は、ハリスの静的な品詞論を大枠としながらも、あえてそこに発生論的次元を上から被せたものであり、しかもこれが百科事典項目であることから、この論題に対する関心の高まりと普及を示すものである。Coote (1788) は、学習英文法書であるにもかかわらず、ことさらに品詞発生順序を扱った序論から始まっているという点で、この問題に対する興味のさらなる拡大と浸透の証左と見ることができる。

そもそも8ないし9品詞を最終的に到達すべき発達段階として前提し、それぞれの品詞がどの順序で発生したかを探求するという問題設定自体が、現在の目で見れば正しいものであるかどうかは疑問である。しかしこのよ

うな論考も、時代が19世紀に入り実証的な比較言語学が本格的に始動する以前の、普遍文法論と言語起源論とが融合した言語研究のパラダイムの一側面として、言語学史の一章を成しているのである。

注

- 1) 以下の品詞分類史の略述は Robins (1997 : chs. 2-3) に基づく。
- 2) 英文法における品詞体系の変遷については Michael (1970) を参照。
- 3) Dugald Steward による用語 (Cf. Bryce's introduction to Smith 1983 [1761] : 24)。
- 4) 以下原典からの長い引用は避けて、関連ページのみを段落ごとにまとめて記すことにする。
- 5) 英語で言えば be 動詞に当たるもので、繫辞 (copula) と言ってもよい。
- 6) この区別の史的概観については Miyawaki (2002 : 207-209) を参照。

REFERENCES

- Alston, R. C. (1974) *A Bibliography of the English Language from the Invention of Printing to the Year 1800*. A Corrected Reprint of Volumes I-X. Ilkley : Janus Press.
- [Anon.] (1771) "Grammar." In : *Encyclopaedia Britannica ; or, a dictionary of arts and sciences, compiled upon a new plan*, 1st edition, vol. 2, 728-745. Edinburgh : A. Bell and C. Macfarquhar. (Repr., n.p., 1971.)
- Bacon, Francis (1879 [1623]) *De Augmentis Scientiarum*. In : *The Works of Francis Bacon*, new edition, edited by James Spedding, Robert Leslie Ellis, and Douglas Denon Heath, vol. 1. London : Longman & Co. and others.
- Bayly, Anselm (1758) *An Introduction to Languages, Literary and Philosophical ; especially to English, Latin, Greek and Hebrew : exhibiting at one view their grammar, rationale, analogy and idiom*. London : John Rivington et al. (Repr., Menston : Scolar Press, 1968.)
- Bullokar, William (1586) *Pamphlet for Grammar*. [*Bref Grammar for English*.] London : Edmund Bollifant. (Repr. in : *The Works of William Bullokar*, edited by J. R. Turner, vol. 2. Leeds : University of Leeds, 1980.)
- Coote, Charles (1788) *Elements of the Grammar of the English Language. Written in a familiar style : accompanied with notes critical and etymological ; and preceded by an introduction, tending to illustrate the fundamental principles of universal grammar*. London : C. Dilly.
- Harris, James (1751) *Hermes : or, a Philosophical Inquiry concerning Language and Uni-*

- versal Grammar*. London : J. Nourse and P. Vaillant. (Repr., Menston : Scholar Press, 1968.)
- [Lancelot, Claude & Antoine Arnauld] (1660) *Grammaire générale et raisonnée*. Paris : Pierre le Petit. (Repr., Menston : Scholar Press, 1967.)
- Lane, A. (1700) *A Key to the Art of Letters : or, English a learned language, full of art, elegance and variety*. London : A. and J. Churchil and J. Wild. (Repr., Menston : Scholar Press, 1969.)
- Michael, Ian (1970) *English Grammatical Categories and the Tradition to 1800*. Cambridge : Cambridge University Press.
- Miyawaki, Masataka (2002) *James Harris's Theory of Universal Grammar : A Synthesis of the Aristotelian and Platonic Conceptions of Language*. Münster : Nodus Publikationen.
- Priestley, Joseph (1762) *A Course of Lectures on the Theory of Language and Universal Grammar*. Warrington : W. Eyres. (Repr., Menston : Scholar Press, 1970.)
- Robins, R. H. (1997) *A Short History of Linguistics*. 4th ed. London : Longman.
- Smith, Adam (1983 [1761]) "Considerations concerning the First Formation of Languages." In : *Lectures on Rhetoric and Belles Lettres*, edited by J. C. Bryce. Oxford : Clarendon Press.